

## 大学生のための対話実践 ——アカデミックなハビトゥスの養成——

福山市立大学教育学部 田中直美

### 背景と目的

本研究の目的は、大学における哲学対話の意義を明らかにすることである。具体的には、哲学的な対話実践を、大学生を対象に実施し、それを分析することで、大学におけるアカデミックなハビトゥス養成、つまり、みずから問いを立て、図書や他者と対話しながら研究を深めていくという自主的な学びに向かう姿勢を養成することにどのように有効かを明らかにすることである。

マシュー・リップマンが大学生の思考力を懸念して「子どもの哲学」(以下 P4C:Philosophy for Children)を始めた 1970 年代以降、P4C は世界中で盛んに行われるようになった。日本の教育機関では特にこの 10 年の間に、幼稚園から大学まで幅広く哲学対話が取り入れられている。哲学対話では、疑問について、参加者が問いあいじっくり考えを深めていくが、その内容は基本的には経験に基づいて進められる。こうした対話は、専門的な知識を用いて研究を行う大学において実践する場合、P4C の意義はどこにあるのだろうか。

以上により本研究では、専門的な知識が求められる大学という学問の場で、主に個人の経験に基づいて対話を行う哲学対話がいかにアカデミックなハビトゥス養成に寄与しうるのかを、実際に対話実践を行った上で(1)学生へのインタビュー(2)ファシリテーターの認識(3)先行研究の 3 つを比較検討によって明らかにすることを目的とした。具体的な内容は論文等で発表を予定しているため以下は概要である。

### 研究課題

対話実践は、本学の学生から希望者を募り、第 2 回「対話の時間」と称して授業時間外におこなった。当日の流れは次の通りである。研究の趣旨説明および倫理的配慮についての説明の後、哲学対話について簡単に説明し、ニックネームを決めて名札を作成した。その後、参加者全員で椅子を車座にし、全員の顔が見られるように座り、対話で使用するボールを作りながら自己紹介をおこなった。全員で問いを出しあい、多数決によって問いを一つに決め、対話を開始した。今回は、「どうしてものごとは変化するのか」というテーマで 30 分程度話し合い、ふりかえりシートを記入し、「対話の時間」は終了した。インタビュー調査については分析中である。

### 今後の課題

ふりかえりシートの質問項目は大きく①今回の対話の参加状況をふりかえる質問②P4C と授業の相違をふりかえる質問の 2 項目を設定したが、参加者が少人数であったことと、P4C と授業を比べる際に、参加者が同一の授業を念頭に置いてインタビューに答えていたかどうか不明である点で、より対象者を限定して研究をおこなう必要がある。しかし、対話を楽しむために参加している学生を調査のために限定するのも心苦しいため、研究方法を再考してみたい。また理論研究の整理と接合も課題である。

### 謝辞

今回学生からの要望によって上記の学内の学生同士の対話だけでなく公開講座「多様な価値観と考えるの変化を楽しもう♪ー哲学対話から他者との共在へー」を開催し、市民の方々と対話実践をおこなった。多くの市民の方々と本学の学生が共に考えを深めることができたことは、大学での学びそのものを改めて整理する必要があるかもしれない。研究の土台を考察する手がかりを与えて下さった参加者のみなさんに、また学生と市民のみなさんにこのような貴重な機会をいただけたことに感謝申し上げます。